

校長室だより～和光高校今昔 第42号 H27. 2. 20

埼玉県立和光高等学校 校長 村田 進

記録より記憶の三送会

生徒会の主要行事の一つである3年生を送る会、通称「三送会」が今年も開催される。

12月の認証式によって正式に発足する新生徒会役員たちにとり最初に取り組む仕事是三送会である。当然のように力が入るが「生徒の関心」は残念ながら文化祭や体育祭に比較すると薄い。このギャップをいかに埋めるかが三送会の歴史ともいえるだろう。慣れない準備に手間取り必死の思いでようやく当日に間に合わせる。頑張ったオープニングの反応は冷ややかだが進むにつれヒートアップ。感動的な別れの行事に収まる。苦労が結束を生み、次の行事に向けてのモチベーションが高まっていく。

第1回目となる会は1期生卒業間近の昭和50年2月24日に開かれている。この時の「卒業生を送る会」というきわめてシンプルなネーミングは「卒業生」の文字が「3年生」に変わり今に踏襲されているが、如月会だの記念祭などといった後に私の出会う名称に比べ断然気に入っている。まだ体育館のない時代なので第1回・第2回の会場は埼玉会館、現在の「市民会館うらわ」で行われている。記録を頼りに歴史を振り返ってみたい。まずは若樹第3号（昭和52年3月発行）による2回目となる会について

生徒会のあゆみ・昭和51年度の行事から…二月 三年生を送る会

実行委員会を中心に、去年とは全くちがう形で計画された。去年の反省をもとに、皆が受け身的な会ではなく「三年生を送る」という立場で1・2年生はすべてクラス単位で動いた。内容は、管弦楽による演奏、演技クラスによる歌など音楽的なことが多く、これも来年の課題となることだろう。

気持ちの入った記事に驚かされる。下級生全クラスが合唱や劇を披露するほか、プロのクラシックアンサンブルさらに職員による合唱もあったと聞いている。翌年の第4号にも同じような記述がみられる。形態こそ大きく変わらなかったが半分のクラスが裏方に回りステージ発表がさらに充実したと記されている。初期のころは実行委員会が臨時的に組織され、リーダーシップをとる本部役員と連携し大変機能的であったことも窺い知れる。その背景には第6号で記された次の文から読み取ることができる。

送る会

河野裕一

送る会という行事は、数ある行事の中でも非常に重要な行事と言えます。その理由は2つあります。まず一つは「送る会」という言葉どおりに、3年生を今までの感謝を込めて盛大に送るということで、高校生活を締めくくるといふ重大な意味を含んでいます。そし

でもう一つというのは、新しく誕生した生徒会の初仕事だということです。送る会の成功一つでこれからの生徒会の運命を決定するといっても過言ではありません。それだけこの行事は重要なのです。さて、この送る会の主役は3年生ではありますが、一生懸命準備し発表する在校生も立派な主役であると思います。そんな協力や態度があつてこそ3年生を暖かく送ることができるのだと思います。3年生一人一人の心に残る送る会にしたいものです。



河野君は監査委員長、多分送る会の実行委員長だったのだろう。生徒会役員へのエールのようにも聞こえる。

しかし、実行委員会が消え中央委員会に主体が移る昭和58年あたりから衰退の一途を辿る。担任として送ってもらった57年度の三送会では、サッカー部の田代など人気者2年生による「しぶがき隊」の記憶が鮮明であるがそれ以外の記憶は曖昧

である。さらに、時期のせいだ歴代「卒業アルバム」の三送会のページは全くないし「若樹」にしても日付程度の記載ばかりか全く触れられていない年もあるほどだ。驚くことに自由参加！の年もあったようだ。

かくして紆余曲折を経ながらも今に至っている三送会だが、「お世話になった卒業生のために」という精神は変わらずに続き、太鼓のオープニング、クイズ、ビンゴ、アームレスリング、女装コンテスト、スライドなど工夫を凝らしながら楽しい会になっている。とりわけ「教員バンド」は歴史も古く必ず盛り上がる。昭和の終わりから平成にかけての石丸・内田・郷家・中込・星野らによって編成されたバンドは音楽的にもかなり高レベルでメンバーの入れ替えを図りながら続いていく。日常とのギャップがこのバンドの良さであり、在校生・教員を問わずに卒業を祝う餞（はなむけ）を表したメッセージは心に響く。社会に出て荒波の中、記憶が励ましになった者も数多くいるのではないだろうか。

